

歴史を活かした防災まちづくりに関する研究

Study on disaster prevention act on city planning based on the cultural climate

熊本大学工学部環境システム工学科

野呂 有佳子

1. はじめに

本研究では、自主防災施策を進展させるため、災害時のみのならず平時から地域住民がコミュニティを意識し、地域環境を把握し、地域への愛着が持てるよう、まちづくりに歴史を活かす手法を提案する。

具体的には熊本県内の壺川地区を対象として、住民参加型の災害リスクコミュニケーションの一手法を提案した。まず、本研究における歴史の定義を行い、それに伴って歴史的要素を取り入れた防災マップを作成し、それらを用いて実際に対象地においてリスクコミュニケーションを実施・考察を行った。

2. 壺川地区の歴史

壺川地区は、古くから深刻な水害に悩まされており、地区の歴史は坪井川の被害と密接に関わっている。対象地の概要を地理的条件や水害史から整理し、この地区において防災まちづくりを行う意義を明らかにする。

表ー2 近年における坪井川の水害史（筆者作成）

西暦	年号	内容
1953年	昭和28	白川、坪井川、井井川が氾濫し、「6.26大水害」発生。熊本市内が水没。死者・行方不明者563人、熊本市の最大日雨量411.9mm
1957年	昭和32	坪井川、井井川が氾濫し、「7.26大水害」が発生。熊本市内外を含め、死者183人、重軽傷者63人、熊本市の最大日雨量480mm
1975年	昭和50	坪井川、井井川が氾濫。10日間で梅雨期の年平均値700mを超えた。死者1人、家屋半壊21、床上床下浸水2862
1980年	昭和55	8月の集中豪雨（8・30出水）で約3000戸が浸水被害を受け、11月に第2次激甚災害対策特別緊急事業に着手
1982年	昭和57	各地で河川の溢水、決壊、山崩れ、がけ崩れ等が続出し、死者・行方不明者24人
1988年	昭和63	熊本市では中小河川の氾濫や道路側溝から溢れた水が道路や住宅を襲い、都市型災害となった。床上床下浸水 約5500
1990年	平成2	懸命な水防活動にも拘らず、熊本市街部に流入・氾濫するに至った。熊本市の最大日雨量338mm

2.1 壺川地区の概要

研究対象地は熊本市壺川地区である。対象地の中心部には坪井川が流れており、古くから深刻な水害に悩まされてきた土地である。そのため地区の歴史は坪井川の水害と密接に関わっている。

2.2 坪井川の水害史

壺川地区と歴史的に深い関わりを持つ坪井川について、水害史を年表および過去の新聞記事から整理し、壺川地区への影響を明らかにする。また、水害の視点から今後の壺川地区と坪井川との関わり方について考察する。

3. 防災まちづくりに関する歴史の表現手法

本章では、現在実施されている防災まちづくりの課題を明らかにし、平時から住民間のリスクコミュニケーションを促すための一手法として、歴史を活かした防災マップを作成する。

3.1 近年における防災まちづくりの課題

現在、水害へのソフト対策として市町村によって作成されている洪水ハザードマップにおいての課題を明らかに

する。次に、それらの課題に対して先進的な取り組みにより作成された佐賀県武雄市片白地区での防災マップを使用した防災まちづくりの事例を述べる。

3.2 本研究における歴史の位置づけ

防災における歴史の定義を行い、歴史を以下の3要素に分類し各々の要素の説明を述べる。

- a) 土地の履歴
- b) まちの記憶
- c) ひとの経験

3.3 歴史を活かした防災マップのねらい

防災まちづくりに歴史を活かす意義を考察する。

4. 歴史に重点を置いたリスクコミュニケーションの実践

今日の防災まちづくりにおいて求められている住民1人1人の防災意識を高めること、地域のコミュニケーション能力を高めることを目的として、防災マップを用いて、実際に災害リスクコミュニケーションを行った。

4.1 壺川校区におけるまち歩き概要

日常と非日常（水害時）との擦り合わせを行うことをリスクコミュニケーションのねらいとし、作成した防災マップを用い、水害常襲地である壺川地区においてまち歩きを行った。

4.2 リスクコミュニケーションの成果と分析



図ー1 10町内防災マップ

ヒアリング結果を、歴史の3要素に分類すると、防災における人の記憶の重要性が明らかになった。その結果を防災マップに反映させ

た（図ー1 参照）。

今回の反省を踏

まえ、今後も継続して行うことが歴史を活かした防災まちづくりについて必要である。

5. おわりに

本研究では、防災まちづくりに歴史を活かす意義の考察と、手法の一提案を行った。